



UNITED NATIONS
UNIVERSITY

UNU-IAS

Institute for the Advanced Study
of Sustainability

February
2015

Newsletter 3



UNU-IAS GEOC

United Nations University Institute for the Advanced Study of Sustainability GEOC Programme

ESD、持続可能な開発のための教育

「国連持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development, ESD) の 10 年」(2005 年—2014 年)では、国連大学はユネスコをはじめとする国際機関や各国政府と協力しながら国際レベルでの議論やプロセスに貢献するとともに、地域レベルにおいても自治体、高等教育機関、学校、NGO、企業等と協力し、ESD の活動を推進しました。

RCE (Regional Centres of Expertise on ESD, ESD に関する地域の拠点) は、持続可能な開発のためのグローバルな学習の場の構築を地域レベルで実現する手段として国連大学が提唱したもので、高等教育機関、NGO、自治体、民間セクターなど、地域の ESD 実践者の連携・協力を促進する対話の場として、2014 年 7 月現在、世界 129 地域が認定されています。2008 年に発足した ProSPER.NET (Promotion of Sustainability in Postgraduate Education and Research, アジア太平洋環境大学院ネットワーク) においては、大学院の講座やカリキュラムにサステナビリティを組み入れるなど高等教育機関における ESD 活動の強化を推進しており、2014 年 7 月現在、32 の大学院が加盟しています。ア

フリカでは、持続可能な開発の課題に取り組む次世代の専門家育成をめざし、アフリカ・日本・北欧の高等教育機関、国際機関等と連携し、アフリカの 8 大学において修士過程プログラムを実施しています。また、地球環境パートナーシッププラザ (GEOC) での活動を通じて、国内外の市民社会に向けた ESD に関する情報提供や、ESD も含めた持続可能な社会づくりに関するパートナーシップ形成を進めています。

2014 年 11 月 10 日～12 日に開催された「ESD に関するユネスコ世界会議」では、GEOC は併催イベント「地域のステークホルダーを ESD でつなげよう」を開催しました (裏面参照)。このほかにも、国連大学では ESD 世界会議のサイドイベントや「グローバル RCE 会議」(11 月 4 日～7 日、岡山市)、「持続可能な開発のための高等教

育に関する国際会議：2014 年以降の高等教育のあり方」(11 月 9 日、名古屋市) などを開催し、ESD の取り組みの発展・深化に貢献しました。2015 年からは ESD の 10 年の後継プログラムとなる「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム」(GAP) がユネスコを中心



に実施され、政策の推進、学習及び研修環境の転換、教員と指導者の能力開発、若者への支援、地域レベルにおける ESD 活動の促進、という 5 つの優先行動分野に焦点が当てられます。国連大学でも、政策に直結する研究を実施するシンクタンクとして政策の推進に貢献するとともに、RCE や ProSPER.NET の取り組みを通じて、地域レベルでの ESD 活動や学習環境の転換を推進し、2015 年以降も世界全体の ESD 活動の推進に貢献していく予定です。

GEOC Global Environment Outreach Centre

地球環境パートナーシッププラザ (GEOC) は環境省と国連大学が共同で実施する、環境や持続可能な開発に関するパートナーシップ形成のための国際的な活動です。

ESD ユネスコ世界会議にて「地域のステークホルダーをESDでつなげよう」開催

2014年11月に名古屋市で開催された「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議」において、UNU-IASは環境省とGEOCとともに併催イベント「地域のステークホルダーをESDでつなげよう」を開催しました。今後のESDのさらなる発展に向けて、動物園や博物館などの社会教育施設のほか、森林や自然公園など、地域の様々な拠点においてESDに関する活動や連携が期待されています。今回のイベントは、UNUが推進する「ESDに関する地域の拠点」（RCE）と環境省の環境パートナーシップオフィス（EPO）などの活動をふまえ、地域のステークホルダーの今後の連携を促進するための事例の紹介や課題の検討を目的として開催されたもので、NGO関係者や自治体職員・教育関係者など約70名が参加しました。

開会挨拶では、**渡辺綱男氏**（UNU-IAS シニア・プログラム・コーディネーター）が、この会議を通して新たな連携や活動のきっかけが生まれ、様々なつながりの中でESDが社会に根付き、発展していくことを願うと述べました。そして、会議のコーディネーターを務めた**及川幸彦氏**（宮城教育大学国際理解教育研究センター協力研究員）が趣旨説明を行い、これまで日本が取り組んできた「つながる」仕組みとして、国連大学が推進するRCE、文部科学省とユネスコによるユネスコスクール、環境省による+ESDプロジェクトなどを紹介し、こうした枠組を地域レベルでどう活用するかが重要であると指摘しました。



続いてリソースパーソンから話題提供が行われました。**永田佳之氏**（聖心女子大学教授）は、大学・企業・ユネスコ・NPOの協働による陸前高田での復興支援活動「こころに笑顔」プロジェクトを例に、ESDは地域の文化や慣習、ニーズに合った、調和のとれた内発的な発展を促すこと、そしてそれを支援することが重要であると指摘しました。また、**アベル・アティティ氏**（UNU-IAS リサーチ・フェロー）はRCEのこれまでの取組と成果について解説し、多様なステークホルダーによるESDの取組を通して、地域社会が課題解決のための変化の担い手であると説明しました。



事例発表では、**齊藤千映美氏**（宮城教育大学環境教育実践研究センター教授）が大学におけるESDの推進や地域の社会教育機関等との連携について説明し、7年にわたる動物園との連携を通じて、目標を共有しお互いの魅力で活動を補完しあう連携のあり方が大切であると説明しました。**大内利勝氏**（仙台市八木山動物公園園長）は、動物園は五感を使った気づきの場として視野の広がりを促す機会を提供できること、動物園が学校と連携することによって長期的かつ多様な教育活動が展開できることを述べ、両者の持ち味を生かした環境教育の実践を紹介しました。**小林幸司氏**（みやぎ・環境とくらし・ネットワーク（MELON）事務局統括）はNPOによる環境教育プログラム作成

事業について説明し、地域レベルでのESD推進には、地域の特性をいかした教材開発や推進基盤となるネットワークの形成、長期的な人材育成と活動の継続が不可欠であると指摘しました。山や川や建物など現存の風景の活性化を試みる風景芸術に長年取り組む**田窪恭治氏**（美術家）は、フランス・ノルマンディーでの教会再生や陸前高田でのオープンスペース作りの活動を取り上げ、地域住民も参加する作品づくりとその場所の活用について説明し、持続可能な未来を考える際にはその地域の歴史・文化や風土を大切にしながら地域を見つめることが大切であると指摘しました。**朱宮文晴氏**（日本自然保護協会保護研究部長）は、綾ユネスコエコパークの管理や生物多様性保全事業におけるステークホルダーの連携を説明し、森林環境教育の実施やユネスコスクールとの連携、さらには今後策定される地域の保全管理計画を通じてESD活動の広がりが期待されることを紹介しました。**星野智子氏**（環境パートナーシップ会議（EPC）副代表理事・事務局長）は、EPOによる環境教育モデルプログラム作成事業を紹介し、EPOのような地域のステークホルダーをつなぐ「橋渡し役」がESDの活性化や人材育成に貢献することへの期待を述べました。

パネルディスカッションでは、ESDの10年の後継プログラムとなる「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム」（GAP）導入後の地域のステークホルダーの連携の課題や展望について議論しました。社会教育施設と学校をつなぐコーディネーターの活用、企業セクターの参画とCSR（企業の社会的責任）やCSV（共通価値の創造）、地域のローカルリソース（人、情報）の有効活用、地域の当事者と外部リソースの連携、地域の優良事例の発掘と共有がますます重要になるとの指摘がありました。そして、ESDのさらなる発展に向けて、さまざまなステークホルダーが人・組織・情報のつながりを深め、主体的・内発的な活動を持続的に進めていくことが重要と総括しました。

